坪井善明著

『近代ヴェトナム政治社会史
——阮朝嗣徳帝統治下のヴェトナム 1847-1883——』

東京大学出版会　1991年　v+303ページ

髙田洋子

I

カンボジア和平のための国際会議が実現し始める前から，日本の経済界においては「空前のベトナム・ブーム」が進行中だ。ベトナムは，冷戦体制の矛盾にとらわれていた体制を方向転換させ，民衆のエネルギーを「市場経済」へ向かって解放しようとしている。アジアに生じつつある大きな時代のうねりは，ベトナム歴史研究にも確実に影響を与えつつある。本書も，この時代の変化を議論の随所に感じさせる。

ベトナムは，北部の紅河デルタに起源をもつ越（キン）族が，周辺諸民族との抗争と統合をくりかえしながら南下し，南北に細長い領土を獲得した歴史をもつ。なかでも19世紀初頭に成立した阮朝は，ベトナム史上初めてほぼ現在の国土に匹敵する領域を支配下に置く政権であった。しかし，従来，ベトナムの歴史編纂において，フランスの植民地侵略に対して無力であった阮朝は，きわめてイデオロギー的にしか叙述されず，また過小に評価されてきた。本書は，この阮朝第4代目の皇帝＝嗣徳帝（1847～83年）の統治体制がフランスの介入によって崩壊する過程をテーマとしている。

阮朝時代に関する従来の研究では，ウッドサイド(A. Woodside)の *Vietnam and the Chinese Model: A Comparative Study of Vietnamese and Chinese Government in the First Half of the Nineteenth Century*（ケンブリッジ〔マサチューセッツ〕，Harvard University Press, 1977年）が有名であり，グエン・テ・アイン（Nguyễn Thế Anh）がサイゴンで発表した *Kinh tế và xã hội Việt Nam dưới các vua triều Nguyễn*〔阮王朝下のベトナムの経済と社会〕（Lửa Thiêng, 1971年）も優れている。またレ・タイン・コイ(Lê Thành Khôi)も *Histoire du Vietnam des origines à 1858*〔起源から1858年までのベトナムの歴史〕（パリ，Sudestasie, 1981年）の最後の部分で，印象的に阮朝支配の特徴を論じている。日本でも，漢籍史料を用いてこの時代の諸問題を個別に扱った藤原利一郎その他の論文がある。

著者は，フランスのベトナム民族学研究者ジョルジュ・コンドミナス(Georges Condominas)博士の指導の下で，本書の底本となった博士論文を仕上げた。史料は，主としてこの時代についての基本的な漢文史料『大南寔録正編』（阮朝の正史）と，当時の在越フランス人が残した報告書，書簡等（南フランスのエクサン・プロヴァンスにある植民地省文書館に保管されている）である。とりわけ後者の分析を通して，政治体制の揺らぎを在越フランス人の眼から描き出した点が，本研究のユニークな特徴であろう。

著者によれば，ベトナム北部征服への道を開いたガルニエ，リヴィエール両事件はこれまであまりにも「フランスの植民地化の過程」としてしか描かれていない。これに対して，著者はフランスの介入がベトナムの15世紀黎朝以来の政治の根本を変えた点を強調する。本書の狙いは，儒教主義に基づく王朝と村落共同体，その両者の「連係の鍵」であった「官人と文紳（ヴァンタン）」階級が，先の2つの事件を契機に皇帝から離反する過程を描き出すことに置かれる。嗣徳帝時代の諸問題を再構成し，外圧と体制内要因の相乗効果による統治体制の崩壊を論じた研究は，世界を見渡しても本書が初めてであろう。

II

全体は9章からなるが，その内容を評者は次の3つの部分にまとめたい。まず，(1)嗣徳帝統治の前史・成立背景を描く第1章から第3章，(2)フランスとの決定的な対決はいまだ見ていない嗣徳体制の前期（1847～74年）を描く第4章から第6章，(3)1874年以降の嗣徳

政府内の世代交代と諸改革の失敗，体制の崩壊に至る後期を論じる第7章から第9章である。では，以下で概要を紹介しつつコメントしたい。

1．第1章～第3章

まず第1章「1847年以前のヴェトナム」では，フランスに支配される以前のベトナム史を概観し，阮朝時代が位置づけられる。著者は，(1)ベトナム民族のダイナミズムは「南への進出」（南進）と「北への抵抗」（対中国関係）の有機的関連のなかで把握されるべきであること，および(2)豊富であった国際関係（民衆レベルでも外交関係においても）を力説する。つまり，「一国史的」，「停滞的」，「閉鎖的」なベトナム農業国家の従来のイメージは歴史的事実に反すると否定し，むしろ逆に多民族性や，地形的にも脱出や外からの潜入の容易な社会，「東南アジアの一地域としてのベトナム」が強調される。

阮朝の基本的な問題を，著者は次のように総括している。ひとつは，ベトナム歴代の王朝国家はその支配の正統性を中国との戦いの勝利を通して民衆から認知されたが，阮朝は対中国戦の経験がなく，伝統的な支配の正統性が民衆によって充分には認められていなかったこと。2つ目として阮朝の創設者阮福映は全国制覇をなしとげるに当たり，軍事面ではフランスに，財政的にはコーチシナ華僑に依存し，政治的には文紳階級の支援によった。しかしその後樹立された中国式統治機構は，華僑や文紳階級は満足させたが，キリスト教やヨーロッパの影響を拒絶するものであったため，しだいにフランス人の敵意を大きくした。それは，嗣徳帝の時代に増幅されて引き継がれた。

第2章「ヴェトナムにおけるフランス人」ではベトナム侵略への道を切り開いたフランス人たち――17世紀以降の宣教師，商人，海軍士官，外交官たちのベトナムでの諸活動が詳しく紹介される。従来の研究がすでに明らかにしてきたように，侵略の主要な「案内役」は外国宣教会と宣教師たちであった。本章では，19世紀半ばからの重要な諸事件にかかわる宣教師たちの言動とフランス介入の関係が，当時の福音活動に関する記録やこの方面の諸研究の蓄積を踏まえて具体的に描かれ，興味深い。またフエ政府との交渉に直接携わった現地政策実行者たちが本国に送った数々の情報も分析され，侵略の実態が明らかにされていく。第2章は本書全体の約4分の1の分量を占め，内容的にも豊富である。

続く第3章「阮朝独立期における中国と中国人」では，阮朝独立期における対中国問題が，(1)政府間関係，(2)商業関係（商人と仲買人），(3)無法者集団（海賊，山賊，旗軍＝太平天国の乱後ベトナムに逃れた武装集団の残党）の3つに分けて論じられる。阮朝政府は自らを北のパートナーと同等と見て北京に朝貢使を定期的に送った（南方世界においてはその中心に位置すると考えた）が，中国政府は清仏戦争が起こるまでベトナムに関する正確な情報を持たなかった。ベトナム人の中国での商業活動は中国側に厳禁されたのに対し，明命帝が2度も中国にベトナム人商人の入国許可を求めたが許されなかった点も大いに興味深い。著者は中国人の自由な商業活動がいかにフランスにとって羨望の対象であったか，ハイフォンのフランス領事の報告書などを引用して紹介している。

2．第4章～第6章

さて，周知のとおり植民地支配はベトナムでも皇位継承問題への干渉から始まった。第4章「嗣徳帝：正統性に異議あり」は，嗣徳帝即位のプロセスと支配の正統性をめぐる諸問題である。紹治帝の死後，皇位を継ぐべき第1皇子洪保（ホンバオ）がフエ宮廷内の実力者間闘争のなかで排除され，第2皇子洪任（後の嗣徳帝）が皇位を継承した。後に洪保は「当然の権利」をもとめて「陰謀」を企て，キリスト教徒に支援を求めた。このことが嗣徳帝による宣教師やキリスト教徒に対する迫害の引き金となり，後のフランスとの対決につながる。また洪保の処刑によって嗣徳帝は兄殺しの烙印を押される。著者は，既存の研究論文を批判的に紹介しながら，その経緯を丹念に追っていく。基本的な漢籍史料と在越フランス人司教や公使，商人らの見解が参照され，それらを総合した著者の判断が明快に示されている。

第5章「嗣徳帝政府の主要人物」では，嗣徳時代の前期の政治体制を支えた4人の主要人物――嗣徳帝，張登桂，潘清簡，阮知方――について，彼らの経歴やエピソード，任務，フランス観などが述べられる。1859年以降ベトナム南部へのフランス軍の侵略は始ま

っていたが，明命時代からの優れた3人の高級官人に支えられて少なくとも1873年までは阮朝体制は安定しており，鎖国とはいえ19世紀前半，すでに彼らは近隣諸地域との対外交流を経験し，国外に関する知識もあった。しかし不幸なことにフランスの強硬な軍事介入に際し，儒教の伝統主義への固執が結局は新しい変化への対応を遅らせ，やがて後述するような国家の内部分裂を引き起こすことになる。

第6章「支持者と反対者」では，体制内部の構成について，支持者としての官人や文紳階級，反対勢力としての「洪保派」や自称旧黎朝の再興派および土匪や海賊の動向などを論じ，体制前期の国内紛争と外からの脅威がまとめられる。

儒教社会における権威の4つの序列は，官人・文紳→農民→職人→商人の順である。著者は科挙制度を詳しく叙述しながら，とりわけ教育行政に携わる官人たちは儒教原理を頑強に支持し，保守派の核となって嗣徳帝政府に大きな影響を与えたと述べる。「文紳」は，文人と紳豪（地方有力者）を含めた概念として使われている。地方レベルの科挙試験に合格して田舎で教師をする者，さらに上の試験を目指して準備中の者たちが「文人」で，村の権威者や豪同会議のメンバーなどが「紳豪」とされる。本来は体制の支持者であるはずの官人・文紳らが，ベトナム南部のフランスへの割譲に怒りを爆発させて1864年，および1874年に立ち上がる。前者は皇族，官人によるクーデタ，後者が1874年のトンキン地方での「文紳の乱」であった。フランス人宣教師やガルニエに利用されたキリスト教徒に対する文紳の蜂起は政府によってかろうじて鎮圧された。

著者によれば，さまざまな「洪保派」のクーデタや，黎維鳳の乱，匪賊・海賊などの反対諸勢力の動向も，一時的で局地的なものでしかなかった。しかし結局，それらはフランスの策謀と結び付き，ベトナムをフランスの最終的な植民地支配へと導いていく。重要な戦局において嗣徳帝が示した政策の「曖昧」性――自国の軍事力以外に，中国，フランス，黒旗軍（旗軍の一派）に救援を依頼した点が強調される。

3．第7章～第9章

第7章「官人の交代と政策変更」からは，フランスとの対決が深刻化していった後期に入る。まず，官人の交代と政策変更が論じられる。科挙試験を通して一新された第2世代の高官――阮文祥，尊室説，黄佐炎が紹介される。彼らはいずれもフランスに対して激しい敵意を抱いており，ことあるごとにフランスとの緊張は増大する。

著者は，レ・タイン・コイによる阮朝の「栄光ある孤立」，「知的退嬰主義」のイメージを否定し，たとえば皇帝は中国語の外国新聞から海外事情についての情報を得ていたこと，西洋人と接触する機会の増大，官人の外国旅行の経験等により政府内ではむしろ数多くの近代化計画が作成されていたと述べる。ただし，残念ながらここではその具体的な内容は明らかにされていない。

近代化のための改革案が実現しなかった理由として，著者は(1)官人は西洋の技術や思想を結局は理解していなかった，(2)近代化のための財源不足，(3)社会変化に対応する新しいリーダー像の欠落を挙げている。

しかし，最大の問題は文紳階級にあった。著者は原住民監察官フィラストル (Philastre) の観察を引用しながら，改革の結果，既得権が奪われることに対する文紳の警戒心はかなりのものであったこと，またフランスと自国民両者の強い要求の板挟みのなかで，政府は日和見的に対応せざるをえなかったと推察する。たとえば，1875年にハノイ，ハイフォン両港が開港されると，石炭，米をめぐってフランス人と中国人の商業活動が競合したにもかかわらず，阮朝の関税収入は少なかったばかりか，輸出が増えて米価が高騰しトンキンでは飢饉が生じた。開港要求に屈した政府への文紳階級の憤激はますます大きくなっていた。

第8章「『文紳』階級の嗣徳帝からの離反」では，1874年の「文紳運動」の鎮圧，土地税制の改革，軍隊配備の改革を通して，「文紳」の嗣徳帝からの決定的な離反が描かれる。

ガルニエ事件の後，儒教国家の擁護を掲げた文紳の蜂起に対して，嗣徳帝はこともあろうにフランス軍とキリスト教徒の力を借りて鎮圧する。また，宮廷は国家財政の建て直しのため，従来の公田を主とした徴税を改め，私田の税を重くした。これは公田を半ば私物化し，田簿を操作している村の紳豪の個人的利益と真っ向から衝突した。さらに，名目的には匪族からの防

衛と開拓を兼ねて設置されるようになった「山防衙」(実際にはフランス軍の侵略を想定するものであった)が，文紳自身の武装を容易にしたとしている。

第9章「仏越紛争から清仏戦争へ」では，中国人匪族撃退のために阮朝が中国軍の派遣を要請（1877年）したことをめぐる仏越関係の悪化，嗣徳帝の病死，王位継承問題，そして清仏戦争へと続く過程が手短にまとめられる。著者は，フランス植民地軍がハノイ攻略を積極化させた直接のきっかけは，通説で言われるような紅河の通行をめぐる黒旗軍との衝突からでなく，ホンゲイ炭鉱の採掘権をめぐるフランスと中国人商人との利権争いにあったとしている。

III

さて，冒頭で述べたように，本書はフランスの介入を契機とするベトナム前近代政治体制の崩壊過程をとらえようとする意欲的な研究である。全体として，嗣徳体制下の重要な事件がフランス人の目を通して生き生きと細部にわたって描き出され，歴史ドラマを見るような錯覚に陥る。政策決定のベースとなる当時のベトナム社会の断片が魅力的に取り上げられて，政治社会史という本書のタイトルが採られた理由もうなずける。ただし『近代ヴェトナム政治社会史』とされるのには少々違和感を感じた。嗣徳帝が即位して最初にキリスト教迫害令がでた1847年から1883年に終わるこの時代を「近代」とするには無理がなかろうか。

評者の若干の不満は，同様のテーマを扱った先学に対する議論が不十分で，かつ本書の研究史上の位置づけが不明な点である。ベトナム前近代の政治に関する従来の諸研究によってすでに明らかにされたことと明らかでない点を峻別する作業は，不可欠であろう。

さらに述べるなら，桜井由躬雄氏の提起した仮説，すなわちフランスの侵略を許したのは前近代ベトナム社会における「国家」「村落支配層」「流民」の3分断構造であったとする仮説に対して，「文紳階級」をキー概念にその皇帝からの離反を植民地化の決定的要因と主張する本書の視角は，どのような位置関係にあるのだろうか。本書ではベトナム社会の圧倒的多数を占めたはずの農民の顔が，依然として見えてこない点が評者には気になる。

とはいえ，本書は問題が総花的に展開されてやや散漫な印象を受ける反面，阮朝時代をさまざまな角度からとらえなおすための示唆に富んでいる。本書の刊行を機に，新しい時代のベトナム研究が，日本の阮朝研究の水準をさらに向上させることを期待したい。

（千葉敬愛短期大学助教授）